30 MINUTES トーキング

『短歌は私にとって〝魔法の杖〟なんです。』

◇歌人――俵 万智さん

〝この味がいいね〟と君が

五足の靴

明治四十年（一九〇七）、与謝野鉄幹、木下杢太郎、北原白秋、平野万里、吉井勇の五人が天草を中心とする九州西部のキリシタン遺跡を巡り、紀行文「五足の靴」を著した。この旅行は、一行五人のその後の文芸活動に画期的な影響を及ぼしたといわれる。

彼らが目指した大江天主堂のある天草町では、「五足の靴」を記念して毎年「五足の靴顕彰全国短歌大会」を開いている。

歌集『サラダ記念日』でセンセーショナルなデビューを飾った俵万智さん。一般にはなじみの薄かった短歌をグッと身近に引き寄せてくれました。

今回は、天草町で行われた「五足の靴顕彰全国短歌大会」に出席された俵さんに、短歌の魅力などを語ってもらいました。

「五足の靴」遊歩道を歩く

―天草の印象はいかがですか。

海の青さが違うんですね。私、海が大好きなので海がきれいだって聞くとすぐ行きたくなるんです。町の方々もとても気さくで暖かくて。こういう人との出逢いも旅の楽しみの一つですね。

―「五足の靴」についてはどう思われますか。

大変なことだと思います。明治の文壇のそうそうたる顔ぶれですものね。その五人がこの天草の地を訪れすばらしい紀行文を残しているなんて、正直いって今まで知らなかったんです。ここに来て、実際自分でその足跡を辿ってみて感激も深まりました。私も彼らと同じ20代の日にここを訪ねることができて嬉しく思っています。まわりの人たちには「六足の靴」だっていわれているんですよ。今度はぜひ阿蘇まで足を伸ばしてみたいなあ。

―短歌の魅力って何なんでしょう。

そうですね。まず、五七調のリズムの心地良さ、三十一音の持つ不思議な魅力とでもいうのかな。感じたことをこの短い文の中に切り取っていくんです。短いが故の強さみたいなものがあって、その中の、多くの「言わない」部分を読む人がどう膨らませてくれるかも楽しみなんですよね。作り手と読み手がいて初めて短歌の世界が成り立っているんだと思います。

また、日常生活の中の小さな感動や心の揺れ、見逃してしまいそうな些細なことも歌にすることでとどめられる。もう一度感動をかみしめることもできます。

―言葉に対する思い入れ、こだわりは昔からお持ちだったんですか。

母は本が大好きな人でよく読んでくれました。私も本の好きな子でしたから言葉に対する興味は子どもの頃からあったと思います。高校時代は演劇部、大学時代はアナウンス研究会と、いずれも言葉を通して表現する共通の世界にいたんです。

ただ、私は目新しい言葉を使うとか、言葉の持つ起爆力に頼る使い方はしたくありません。自分の思いを大切にしていれば言葉はあとからついてくると思うんです。ですからピッタリくる言葉が見つかった時は本当に嬉しいですね。雅やかで風流なものだけを歌ってても窮屈でしょう。私は自分の身近なことを自分の使いこなせる言葉で歌おうと思っています。

―これからの抱負をお聞かせ下さい。

私は欲張りだからいろんな分野にチャレンジしていきたいですね。多くの人たちと出会い、良い刺激をたくさん受けたいし。でも、私のそういう願いを可能にしてくれたのも短歌のおかげなんですよね。だから、私にとって三十一音は〝魔法の杖〟なんです。